

## 札幌農学校の遺跡と「高畑地図」

広大で自然豊かな北海道大学の札幌キャンパスは、その全域が遺跡として指定されています。現在の北大で展開される教育・研究活動に先立つこと約2000年前からの人々の暮らしの跡が、キャンパスの地中に埋もれているのです。遺跡は人類の歴史の証言者であり、また保存・活用しながら未来に引き継ぐべき貴重な文化資源でもあります。大学での教育・研究の舞台となる校舎や研究棟の建設は、必然的にキャンパスの地下に眠る遺跡の破壊をとまいません。北海道大学埋蔵文化財調査室では長年にわたって、キャンパス内に残されている遺跡を保存・活用するために、そのような工事に先だって発掘調査を実施してきました。本シリーズ（12回）では、これまでに明らかになった北大キャンパス内の遺跡の概要と、北大埋蔵文化財調査室の調査活動について紹介いたします。

\*

北大のキャンパス周辺に多くの遺跡があることが知られるようになったのは、意外とふるくて100年以上も前のことです。明治12年、大森貝塚（東京）を発掘して近代日本の考古学の父と呼ばれるエドワード・モースが札幌農学校を訪れます。その際に、農学校職員に案内されて、学校の近くでいくつものマウンド（塚）を目撃します（E.S.モース『日本その日その日』）。最も大きなマウンドは、直径約7m・高さ約0.7mであったと記録されています。モースが見たマウンドの正体は、本州の古墳文化の影響を受けて北海道で独自に展開した「北海道式古墳」（8～9世紀ごろ）の可能性がります。この記述は、北大キャンパス周辺で遺跡の存在を確認した最も古い記録の一つです。またその当時、農学校教職員の間でも古代の遺跡に対する関心がひろがっていたことを示す記録としても興味深いものです。

明治29年発行の『札幌沿革史』の編纂に参画した高畑宣一は、その前後する時期に札幌市域

北部（琴似川を中心とする地域）の遺跡分布図を作成しました（羽賀憲二『北海道考古学』11輯）。図中の旧琴似川の兩岸にみられる印は、いまだ埋まりきらない窪地の状態で残されていた古代の竪穴住居址の位置を示しています（写真）。その多くは、古代国家の形成に向かう本州の歴史とは異なる道を歩みだした北海道独自の擦文文化の集落遺跡だと考えられます。

都市化の波はこれらの遺跡の大半を埋め立てて、現在ではその面影さえ残されていません。しかし幸いなことに、高畑によって記録された竪穴住居址の窪地の一部を、現在、北大のキャンパス内で見ることができます。「北大植物園」と「遺跡保存庭園」で見られる地表面の窪みがそれです。また、キャンパス内での土木工事に先だって北大埋蔵文化財調査室が実施する発掘調査によって発見される竪穴住居址の多くも、高畑の記録に残されていたものでしょう。そして、さらに地下深いところには、擦文文化に先行する人たち、縄文文化の遺跡があることが明らかになってきました。

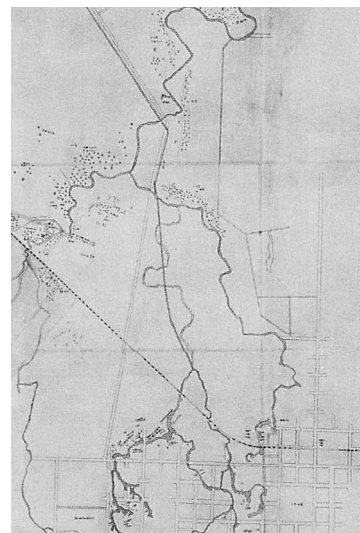


写真 高畑宣一による竪穴住居址分布図（部分）

（埋蔵文化財調査室）